

わくわくして学びに向かうことのできる子供の育成  
～思いやりの心・自律心を高める Do talk 教育を目指して～

中村 隼

大崎上島町立東野小学校

## 1 問題と目的

### (1) 本校の学校教育目標と課題

本校は、広島県豊田郡の大崎上島という離島にあり、児童数は33名の小規模校である。3・4年生と5・6年生は複式で授業を行っている。児童数が33名であるため、異学年との交流の機会は多く、異学年同士の中はとても良い。

本校の学校教育目標は、「自分を大切にまわりを大切にできるわくわくほかほかがある東野小にしよう」である。主体的に学びに向かうには、児童のわくわくする気持ちが必要である。しかし、そのわくわくの方向が、他の誰かを傷つけたり、自分勝手に誰かに迷惑をかけたりのようではいけない。自分のわくわくを実現するためには、必ず相手やまわりの人の気持ちを思いやって行動することが大切である。また、わくわくを見つけたり実現したりするためには、ある程度の自由が必要だと考える。自由を与えられると、先生目から離れる場面が増え、自分で考えて行動する機会が増える。その際に、自分の心を律する自律心が必要となる。先生目から離れたり、気持ちが高揚したりしているとき、してもよいこととしてはいけないことの判断を誤りやすい。

また、本校の児童は自己肯定感が低く、自信が持てない児童が多く、思いやりの心や自律心に課題が見られる。【別紙1】研究構想図の実態にもあるように令和7年3月に実施した児童アンケート結果を見ても、学校生活でやってみたいことがあると答えた児童は80%、人と違うことをすることが不安だと答えた児童は76.5%、自分の意見を言えないことがあると答えた児童は、68.6%だった。このことから、やってみたいことがある児童はたくさんいるが、それを自分から表現することに課題があり、これらは自己肯定感の低さや自信の無さからのものだとわかる。その他にも、人が傷つくことを言うてしまうことがあると答えた児童は45.7%、時間を守ることができていないと答えた児童は31.4%だった。このことから、相手の気持ちを考えて行動することや、自らの心を律して行動することにも課題がある。

教師から見ても、感想を言う場面で誰も手が挙がらないことや、他の人の行動や様子を見てから行動することが多くあり、児童の自覚と教師の見取りに相違はない。

## (2) 本研究の目的と達成するための手立てについて

今年度の本校の課題は、自己肯定感が低く、相手を思いやる心と自分を律する心が弱く、わくわくして学びに向かうことができていないことである。そこで、本研究の目的を、思いやりの心・自律心を高める Do talk 教育を通して、わくわくして学びに向かうことのできる子供を育成することとした。

まず、児童がわくわくして学びに向かうために必要な資質・能力として、高い自己肯定感と表現力、思いやりの心と自律心が必要ではないかと考えた。自己肯定感を高めることにより、自分の思いや考えを伝えられる表現力を身に付けることや相手を思いやる気持ちや自分を律する心を高め、自分で考えてよりよい行動ができる考動力を身に付けることで、わくわくして学びに向かう子供になると仮定した。

## 2 研究構想について

### (1) 「Do talk」とは

「Do talk」とは、東野小学校独自の造語で「話す」と「道徳」を掛け合わせたもので「Do (道) talk (徳)」と読む。話す機会を意識した道徳教育をすることで、表現力が身につく、自己肯定感も高まっていくのではないかと考えた。積極的に話す道徳教育を、学校教育全体で取り組むことで、表現力を身につけ、自己肯定感を高めていこうと考えている。

実際に、Do talk 朝会を実施し、話題についてできるだけたくさん会話する時間を作った。また、1学期は道徳の授業の中で Do talk している状態とは、どのような状態のことなのかについて教師間で考えを深め、Do talk の定義について考えた。Do talk とは、「主体的に自分の思いを思いのまま正直に、本音を伝え合うことを通して、他者の考えを知ることにより喜びを感じ、考えを変えたり深めたりして自分自身を見つめ直そうとする状態のこと」と定義づけた。この状態を目指すために、2学期から指導案の中に Do talk ポイントを記入するところを作り、話し合いをさせる場面を見える化して授業を考えていくこととした。

## (1) Do talk 教育の構想

### ア 研究の仮説

- 1 自己肯定感を高め、表現力を身につけることができれば、主体的な学びに向かうことができるようになる。
- 2 特別の教科道徳の内容項目 A (1) 自律、B (6) 思いやりに重点をおき、思いやりの心、自律心を高めることができれば、自分で考えてより良い行動ができる考動力が身につく。

### イ 研究仮説についての手立てと効果

#### ① Do talk

授業内外で主体的に自分の思いを思いのまま正直に、本音を伝え合うことを通して、他者の考えを知ることにより喜びを感じ、考えを変えたり深めたりして自分自身を見つめ直す状態を目指した。授業内では、意思表示カードを用いるなど道徳の時間で Do talk するための取り組み（写真 1）について考えた。また、Do talk 朝会（写真 2）を実施し、テーマに沿って、たくさん話す活動をする中で表現力を身に付けようとした。これらの取り組みにより、徐々にではあるが、思いきって話をするようになってきている。



【写真 1 道徳の時間での Do talk】



【写真 2 Do talk 朝会】

#### ② ほかほかの木

内容項目 A (1) 自律、B (6) 思いやりに重点を置いているが、思いやりの心や自律心は道徳の時間だけで培われるものではない。そこで、思いやりの心を育てるために、周りの人の思いやりある行動にもっと目を向けてほしいと考え、学校内に大きなほかほかの木を 2 本設置（写真 3、4）し、1000 ほかほかを目標にした。ほかほかの木に、見つけた親切な行動や、思いやりのある行動、がんばりなどをほかほかレターに記入し、ほかほかレターを貼る。貼られたカードを児童、教師、保護者の人、地域の人が見ることで親切な行動や、思いやりのある行動をしようという雰囲気をつくることを目

的としている。また、周りの人から認めてもらうことで自己肯定感が高まるのではないかと考えている。当人同士の気付きで終わることなく、友だちや先生、地域の人など様々な人の目に触れることで、様々な人がその人のよさに気付けるようになってきた。ほかほかレターも現在 600 を超えている。



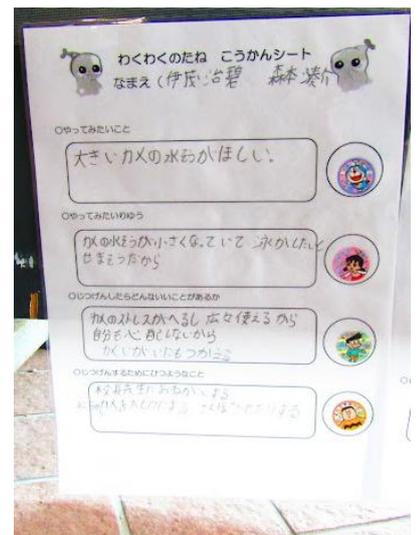
【写真3 1階ほかほかの木】



【写真4 2階ほかほかの木】

### ③ わくわくのたね

わくわくして学びに向かうためには、わくわくを自分で見つける体験が必要ではないかと考え、自分がわくわくできることを提案し、実現を目指す「わくわくのたね」を計画した。具体的には、学校の中でこんなことができたなら良いと思うことや、こんなものがあたらいいなと思うものを、わくわくのたね交換シート（写真5）に書く。次に、校長先生のところへ行き、どんなことがしたいのかを具体的に練り合わせる。すべての欄にシールがもらえたら、わくわくのたねが貰える。そのわくわくのたねに、やりたいことや名前を書き、掲示する。様々な人



【写真5 交換シート】

が掲示を見て、必要だと思うことがあれば、ジョウロカードに書く。そして、実現できた場合は花が咲くというものである（写真6）。この取組により、自ら考えたことが実際に達成できたという自信につながり、自己肯定感も向上してきた。実際に、実現したわくわくのたねの取り組みは【別紙2】のとおりである。



【写真6 わくわくのたねの掲示】

#### ④ 自由進度学習

本校では、学期ごとに1回自由進度学習を取り入れている。自分のペースで学習を進めることによって、学習の楽しさを見つけたり、自分で気持ちをコントロールする自律心を育てたりすることを目的としている。校長室や活動教室、図書室等、場所を自分で選択するなど、様々な選択・自己決定の場（写真7、8、9）がある。



【写真7 校長室①】



【写真8 活動教室②】



【写真9 図書室③】

#### ⑤ ナッジ理論を活用した掲示

ナッジ理論とは行動経済学の理論の1つで、指示しなくても自分で考えてよりよい行動ができるよう、本校では理想の行動に気付かせるような掲示を校内のいたるところに設置（写真10、11、12）し言われなくても自分で考えてよりよい行動をすることを促すものである。言われなくてもできるような自律的な意識を持たせるようにしている。教師が注意するのではなく、児童の目に入る場所に掲示をしておくことで、自制したりあるべき行動に気付いたりすることができる。



【写真10 トイレの入り口】



【写真11 階段の手すり】



【写真12 ランチルームの本棚】

#### ⑥ わくほかチェックシート

わくほかチェックシートは、1日の自分の行動について、3つの項目をもとに振り返るもの【別紙3】である。「わくわく進んで勉強できた!」とは、主体的に学習に取り

組めたかどうかを振り返る。「わくわく進んで行動できた！」とは、わくわくする気持ちで行動できたかを振り返る。「まわりの人の気持ちを考えて、ほかほかな行動ができた！」とは、親切、思いやりのある行動ができたかについて振り返る。一週間ごとに振り返りを書き、自身の行動について振り返る。わくわくして学習や生活に取り組めたかどうか、周りの人のことを思いやって行動できたかどうかについて意識し続けることで、自律心や思いやりの心も育つのではないかと考えている。このわくほかチェックシートを書き続けることにより、自分のことだけでなく友だちや周りの人のことも振り返られるようになってきた。

## ⑦ ほかフォト

校長先生が子供たちの親切な行動や、思いやりのある行動について写真を撮り、学校中の廊下に掲示（写真 13、14）している。児童や先生、保護者や地域の人たちが見ることで、児童の頑張りや、良いところを見つけることができる。また、ほかフォトに載った児童は、様々な人に認めてもらうことができ、自己肯定感も高まり、自信をもつことにつながる。自分のいいところには気付きにくいものであるが、改めて写真として自分の行いを見たとき、自分にもこんないいところがあると感じている児童は多い。



【写真 13 ほかフォト①】



【写真 14 ほかフォト②】

## 個人的に学級内で行った手立てと効果

### ・今日は Do だった talk の時間

日常の活動の中にも、Do talk を取り入れようと思い、一日の出来事や感じたこと等を思いのままに伝える活動を実施した。30 秒間の中で、日直がその日にあったことについて話し、日直以外の児童は反応プレートを持つ。話に賛同できる場合は、「なるほど」の面を向け、もっと聞いてみたいときは、「もっと聞かせて」の面を向け、反応する。この活動を通して、相手の話をしっかり聞こうとする態度、相手が話したことに反応することを目的としている（写真 15、16）。これは、意思表示を苦手にしてきた本学級の児童にも効果があった。



【写真 15 今日は Do だった talk の時間①】

【写真 16 今日は Do だった talk の時間②】

### ・ハッピートレーニング

一日のスタートをハッピーにスタートできるように、ハッピーになれる言葉をみんなまで復唱するものである。声をだすことや、恥ずかしさを捨てることなどを通して、自分を表現することに自信を持ってほしいと考え、実施した（写真 17、18）。動作を付けて、表現することで表現力も身についた。



【写真 17 ハッピートレーニング①】

【写真 18 ハッピートレーニング②】

## ・「MVP」と「ほかほか王」

子供たち同士で、お互いのことをもっと知ってほしいという気持ちや、他人の行動をよく見てほしいという思いから、帰りの会までに「ほかほかレター」を書くことと、

「ほかほか王」と「MVP」の投票を実施した。「MVP」は、「Most Vitality Person」の頭文字をとったもので、一日の中で最も活発に輝いた児童を称えるものである。また、「ほかほか王」は学校全体で取り組んでいるほ

かほかの木のほかほかレターを活用し学級内で見つけた思

いやりのある行動や親切な行動をカードに書き、一番多く書かれた児童を称えるもの

(写真19)である。「ほかほか王」と「MVP」の投票を毎日することで、学級内の友だちの良いところや親切・思いやりのある行動に目を向けることができるようになると考えた。また、友だちから認めてもらうことで、自己肯定感も高まっていくのではないかと考えた。実際に選ばれた児童はとても嬉しそうな表情を浮かべている。



【写真19 MVPとほかほか王】

## ・毎日の記録を残す

学級の中で、毎日の記録を残していくことが大切だと感じた。今年は、3つのことを行った。1つ目は、毎日学級通信を出すことである。毎日の小さな出来事も学級通信を通して共有している。また、クラスメイトの良かった出来事を掲載し、友だちの良いところについて気付かせている。2つ



【写真20 毎日の記録】

目は、わくほかダイアリーを決めることである。わくほかダイアリーとは、毎日その日にあった印象的な出来事を残していくものである。学校行事や、クラスの出来事など、対象は様々である。3つ目は、一日の写真を撮ることである。帰りの会で、教師も含め全員で毎日写真を撮り、教室の後ろに掲示(写真20)をしている。これは、教師にとっても児童にとってもうれしい足あととなっている。

以上の3つの活動を毎日行うことにより、学級内での一体感が生まれた。学級開き

当初は、輪の中に入ることができなかった児童も少しずつ入ることができるようになり、学級内での絆が生まれた。

### 3 研究成果

令和6年度3月に行った学校生活にかかわる児童アンケートと令和7年7月に行った学校生活にかかわる児童アンケートの比較結果は【別紙4】のとおりであった（令和6年度全校児童数36名、令和7年度全校児童数33名）。

研究成果として、2つ挙げられる。1つ目は、学校生活の中でわくわくして学びに向かう児童が増えたことである。「あなたは学校生活の中で、自分のやりたいことがありますか」という質問に対して、令和6年度3月に行った児童アンケートは、肯定評価が79.1%であったが、令和7年度7月に行った児童アンケートは、肯定評価が92.6%であり、13.5%も上昇している。これは、わくほかチェックシートで日々の行動を振り返ることや、わくわくのたねの実施によって、自分のやりたいことを見つけることができるようになったからではないかと考える。

「学校生活は楽しいと思いますか」という質問に対して、令和6年度3月に行った児童アンケートは、肯定評価が95.3%であったが、令和7年度7月に行った児童アンケートは、肯定評価がさらに1%上昇し、ほとんどの児童が学校生活は楽しいと感じている。これは、自分のやりたいことを見つけることができるようになったと考えられる。また、昨年度から実施しているほかほかの木取り組みを通して、児童にとって安心・安全な風土を醸成することができているからではないかと考える。

2つ目は、相手のことを思いやることのできる児童が増えたことである。「あなたは学校の中で、周りの人から大切にされていると思いますか」という質問に対して、令和6年度3月に行った児童アンケートは、肯定評価が76.7%であったが、令和7年度7月に行った児童アンケートは、肯定評価が85.2%であり、8.5%上昇している。また、令和7年度7月から新たに実施した「あなたは、まわりの人の気持ちを考えて行動できていますか」という質問に対し、肯定評価は92.6%であった。この結果から、わくわくして学びに向かうことができている児童が多く、相手を思いやることのできる児童が増えてきていると言える。学校生活の中で、ケガをした児童がいたら、保健室まで付き添う場面や、友達のがんばっている姿を見て、応援している場面などをよく見ることができた。

その他にも、研究の成果として自分の意見を言うことができる児童が増えたと感じてい

る。昨年度は、感想を言う際に、誰も手が挙がらないことがよくあった。しかし、11月現在では感想を発表する際に、よく手が挙がるようになってきた。様々な取組の中で、自己肯定感が高まり、自分自身に自信が持てるようになったことで表現することができるようになったのではないかと感じている。

#### 4 課題

本研究では、わくわくして学びに向かう児童を育てるために、Do talk 教育を中心とし、思いやりの心や自律心を育成しようとしてきた。令和7年度7月に実施したアンケートでは、主に自律心に関わるアンケート項目の数値が低かった。例えば、「あなたはルールがなくても、正しい行動ができると思いますか」という質問に対し、肯定評価は62.9%であった。また、「あなたは時間をまもることができていますか」という質問に対し、肯定評価は70.4%であった。以上のことから、自律心について課題が見られるため、今後は特別の教科道德の授業を中心に他者から言われなくても自分でより良い行動を考えて行動できる力を身に付けるためにどうしたらよいのか考えていきたい。

Do talk 教育では、自分の思いを伝えようとする姿は見られるようになってきた。しかし、話を聞く側の人には話を聞いておらず、対話にならない場合もあることが現在の現状である。相手の発言に反応がなく、聞き流している様子も見られる。そこで、話を聞く側に、反応する道具を持たせることも工夫の1つではないかと考えた。

例えば、学級内で行っている「今日はDoだったtalkの時間」(写真15、写真16)では、共感できるときには、「ふむふむ、なるほど」の面を向ける、もっとくわしく聞きたいときには、「もっとくわしく聞かせて」の面を向けて反応しようと児童に声をかけた。すると、道具を使って動作化することによって、子供たちも意欲的に取り組み、積極的に相手の話を聞いて、反応することができていた。相手の話を聞くだけでなく、相手の話を聞いて何か考えたり、反応したりするように児童を育てていき、Do talkにつなげていきたい。

本校では、令和7年度4月から道德科を研究教科として、研究を始めたばかりである。今回の研究で見つけることのできた課題をもとに、引き続き児童にどのような資質・能力が足りないのか考え、手立てを計画していきたい。そして、わくわくして学びに向かうことのできる児童を育てていきたい。